

転生したら竜種でした！？

黒猫

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

友人を庇つた少女が何故かファンタジーの世界にチート級の竜種として転生してし
まい、のほほんと未来を生きていくお話。
恐らくリムルとの出会いは遠い未来と思われる。

目

次

始まりの転生

睡眠学習とはこの事か

白米が恋しい

出会い

王国なんてなかつた

24 18 14 10 5 1

あさが来た

始まりの転生

今日も友人と仲良く大学で講義を受け、図書館へと行つていた。
これでも名門と言われるほどの大学に行つてているのだ。

6時くらいになつた時かな？

横断歩道を渡ろうとした時、こちらへと猛スピードで走つて行く車が見えた。恐らく
止まれないであろう程のスピードだ。

友人は車に気が付いていない。

思い切り駆け出し、ドンッ！と友人を歩道へ押し出す。

自身の体は道路へと向かつて行く。その時、友人の驚いた顔が見えた。

——バイバイ、世界。こんな短い人生でも、楽しめたよ。

そう思うと同時に車にぶつかる。目の前に広がる朱。

痛い、いたいのはやだなあ。痛覚なんて無くなつてしまえ。

『……確認しました。『痛覚無効 ex』の獲得に成功。』

何？この電子音みたいな。

……あ、PC！電気流してデータ消さなきや。

みられたらやばいもの入つてるし。多分それでいいだろ。

『……電流によるデータの消去…情報不足により実行不能。』

代行措置として電流耐性獲得。付属して麻痺耐性獲得。』

死ぬ前に知りたいこと全て調べておけば良かつた…

ていうか酸素が足りない。美味しい空気を思い切り吸い込みたい。

『確認しました『スペチシルモノ叡智之王』を獲得。

続いて『大気操作』を獲得。『分子操作』に進化させます…成功。』

何この声。そんなポンポン進化させたりするならもういつそ創ればいいじゃないの。

『確認しました。『創造主』を獲得。『分子操作』を元に『法則操作』を創造します。

『法則操作』の獲得を確認。』

なにこれ怖。いつになつたら終わるの。

時間が長く感じるよ。短い時間が長いよ。

『……代行措置として『時間操作』を獲得。』

幻覚が見えてきた……それに体が熱い……やつぱり死ぬんだな。
『確認しました。『夢幻^(ユメノナカ)』を獲得。続いて『熱変動耐性 e x』を獲得しました。』

人間は血液が三分の一無くなると死ぬんだつけ？

『血液の不要な体を作成します。』

もう勝手にどうぞ。ああ、眠い。

眠気に負けると謎の声も聞こえなくなり、夢に溺れていく。

その際に何か聞こえた気がしたが、意識は闇に飲まれて行つた。

いらっしゃいませ。マスター、お待ちしております。

そのスキルは主人の為に、更なる進化を開始する

この先の未来で主人が決して辛い思いをしないために。

『スキルの進化を開始します。『叡智之王』に『創造主』と『法則操作』を統合します。

スキルの進化に成功。『叡智之王』は消失し、『全知全能^{ゼウス}』となります。』

『続いて『夢幻』をコピーし、『時間操作』と統合します』

それはいつまでも続いた。

終わりのないようにも思えたスキルの進化は終わりが見え始めるのだった。

睡眠学習とはこの事か

何者かの声が聞こえ、目が覚める。

『やつと起きましたか、マスター。』

あなたは…それにここは?

『解。私は『全知全能』。ここは時空の果てです。』

時空の果て…辺りを見渡すと何も無い。信じ難いが、どうやら本当らしい。
それにもしても一体なぜこんなところに。

普通の転生物なら人間とかゴブリンとかワラワラいるよ。

『解。ここは転スラと言うマンガの世界です。本来ならばマスターはガドラとギイの二人に出会う筈でした。しかし、時空の果てまで飛ばされてしまった様です。』
なんという事だ…

転生したらスライムだつた件の世界だと？つまりリムル達もそのうち産まれるのか！

よつし、めっちゃ頑張つたる。
何すればいいの？全知全能さん。

『魔素を溜め、ヴエルダナーヴア達を創造しましよう。スキルの心配はせずともおつけーです！私が全て進化させました。』

全知全能、有能。

なら、私は寝てるから魔素を作るのは頼んだよ！
えつて言う声が聞こえた気がした気もするが私は眠いせいだと誤魔化し、眠りについた。

『マスター、いい加減に起きろください。眠りについてから50000年、そろそろ太陽などの惑星が出来始めました。』

なんかお口悪いよセンセイ。

にしても惑星が出来始めたのか、わーい

あれ、原作ではヴエルダナーヴアが世界を創るんだよね？
ヴエルダナーヴアいないよ？どうするの？

『では、個体名　ヴエルダナーヴア　を　スキル『混沌之王』^{カオス}により創造する事を提案します。』

創れるんだ：

てかそんなスキルあつたつけ？

『膨大な魔素を代償に全てのスキルを究極スキルにしました。』

センセイ万能すぎい：

で、イメージすればいいのか？

『その通りです。マスター、イメージです！イメージ！』

流暢に話せる様になってきたんだね。わかりやすい
では、集中して……いざ！

その姿を創り、意思を持て！ヴエルダナーヴアよ！

目の前に魔法陣が出来たかと思うと、でかい竜が姿を現す。

これがヴエルダナーヴア…か。

にしても魔素がごつそり取られた。

「はじめまして。貴方の名前はヴエルダナーヴア、私は貴方の姉？となる者よ。」

「ヴエルダナーヴア…それが僕の名前。ありがとう！姉上」

なんか可愛い。それに私と色違いだし……は？

今更ながら自身の体を魔力感知で見てみると、薄桃色の目に角、そして白い体。さらにでかい巨体。

どうやら竜種らしい。嘘だと信じたいが無駄だろう。

人の姿になれる？ センセイ

『なれます。念じて下さい。』

念じて下さいって…

センセイは本当の事を言うから言う通りにやつてみよう。

ふんぬぬぬぬ…

どんどん視線が小さく…成功したらしい。魔力感知で見てみよう。

150cmも無いと思われるほどの小さい背、白くてすべすべの肌、桜色と淡紅色のヘテロクロミア、薄桜色の髪には赤のメッシュがはいつている。ちなみに裸、羞恥心なんぞ感じない。だって、性器が無いんだもの。とりあえずじやぶじやぶ出る妖気を服に変える。

さらば前世の私、美少女に生まれ変わったよ。

「その姿は？」

「後に生まれる人間つていう物の姿だよ。人によつて姿形も性格も違うけどね。」

「人間ですか。もっと聞きたい、です！」

可愛い弟だ。沢山前世の話をしてあげよう。

一人目の弟、可愛い。

次は魔素少なめにしよう。うん。

白米が恋しい

あれからヴエルダと人間の話やご飯の話をしていた。ご飯の話をしているとふと、白米を思い出す。

ほつかほかの白米に沢山のイカナゴをのせてその上からお茶をかけると美味しいイカナゴ茶漬けの完成。

じゅるり……またいつか食べたいなあ。

なんてもう二度と出会えないであろう白米に思いを馳せているとセンセイが話し掛けてくる。

『マスター、個体名　　白氷竜ヴエルザード、灼熱竜ヴエルグリンドの2体を創造出来るほどの魔素が貯まりました。『混沌之王』で創造しますか?』

ついにあの2体を創造出来るらしい。

ゼウス大先生、魔素調整はお願ひしますよ!

『了解しました。』

それでは、創造開始！

意識を集中させ、魔方陣を描く。

隣でヴエルダが何が始まるのかと目をキラキラさせている。

辺りが強い光に包まれると赤と白の2体の竜が現れる。ヴエルザードとヴエルグリンドだ。

『2体の創造に成功。名付けちやつて下さい。』

「白い君がヴエルザード、赤い君がヴエルグリンド。私は君達の姉になる者よ。」

「僕はヴエルダナーヴア。姉上、妹を創つてたんですね！」

目をキラキラさせながらこつちを見てくる。

純粹な心を持つてているようだ。私の精神に500のダメージ！

「よろしくお願ひします！姉上、兄上！」

「よろしくお願ひいたします。姉上、兄上」

3体とも可愛い……よつし、この調子でヴエルドラも早く生み出すぐ！
というわけで、寝る。

いきなり寝始めた私に驚いた3体だが、一緒に寝始めた。
荒ぶる心を押し殺し、眠りにつき始めた。

それから100年程：

「姉上、いい加減起きて下さい。」

ヴエルザードの声が聞こえ、チヨツップをかまされる。扱いが雑過ぎやしませんか？

『マスター、魔素が全て回復しました。』

大先生、ありがとう！これでヴエルドラも生み出せるよ！

それじゃあ意識を集中させよう。

辺りに強い風が吹いた後、1匹の竜が現れる。ヴエルドラだ。
にしても、久しぶりの弟だからつい魔素量を多くしてしまった。

「君の名前はヴエルドラね。」

「は、はい！よろしくです、姉上！」

はい天使確定。可愛いです。

そう言えばヴエルドラは何回か生まれ変わつてるんだつけ？

記憶は引き継ぐけど性格は変わるとかなんとか……

それにも関わらずヴエルドラだけ人の姿になれない様だね。

魔素の扱いが未熟なのかな。

にしても、すごい眠い。寝足りない気がする。

次起きる時には人間が生まれていると期待したい。

そんなわけで眠らせて頂こう。

おやすみなさい。

そして、次会う時には起こすためにチヨップをかまさず優しく起こしてね……（）

出会い

あれから数年後、ヴエルダは無事に人間の文化を発達させることが出来たらしい。ある日急に起こされて恋人が出来たと自慢してきた時にはイラついたな。

思わずリア充爆発しろつて言いかけたよ。

それから数日後、私は少女にであつた。

白い髪に赤い目、雪の様な肌をしている。所謂アルビノだ。

少女は、

「自分は蛇の祖だ。人間達に洞窟で襲われて、永き時を経て魔人へと成れた。」と言つていた。

少女には名が無かつたので”シロア”と名付け、アルティメットスキル『噬フ者』を授けた。

そしたらなんか懐かれた。

シロアリと仲良くして行くうちに共に旅にする事になつた。

今は西にある小さめの国で食事を済ませていたのだ。

この世界の料理は非常に不味いのだ：

クロワッサンが石のように固いし、味もしない。それにスープの味もござりし頂けるだ
ろう。

まあ、こんな感じでこの世界の食事の楽しみは果物位しかないので。

宿の人間が寝静まつた頃、私は行動を開始する。

本来私には睡眠など必要ないので、常に動き回つていられる。

それで今夜、何をするのかというと……

米を作るのです！というわけで準備OKですか大先生！

『マスター、準備OKです。』

大先生、流石つす！尊敬するつす！

というわけで全ての作業を大先生にまるn：任せる。

『出来ました！おにぎりです！』

はやつ!?はやいよ、速すぎるよ。

『ふつふつふつ……どうぞお食べ下さい!』

頂きます!パクッとな。

おお…ふおおおおおおおお!!

噛み締める度に甘くなつていき、どんどん胃の中に入つていく。
白く、ふつくしいフォルムをしたこの白米こそ、日本人の主食と言えるわけがわかつた気がする。

にしてもこの米は素晴らしいもちもちしていて雑味が無く、甘い。ほんとに久しぶりの米はうまいよオ……

びやあ、あ、あうまひい、いい、い、

と叫びそうになるが自重する。今は真夜中なのだ。
誰かにみつかつたりしたらどうなる事か……

さあ早く寝よう。明日は隣の大きい国へと行くのだ。

起きれなかつたらシロアにしばかれてしまう。
それか置いてかれてしまうのだ。それだけは阻止せねば。

ふと、視線を地面から上げると手毬サイズの犬（？）が2匹見える。
『あれは犬神です。どうやら子供のようですね…』

よし保護しよう。

理由は可愛いから。以上

「おいで…蜂蜜だよお～」

「クウン…」

溢れ出る邪念を抑えながら犬神に蜂蜜をやる。
懐かれたらしい。やつたぜ

名前は明日のうちに考える。今日はもう寝よう。
……米美味しかったなあ。

あさが来た

新しいあさが来た。希望の朝だ。

というわけで、次の日です。

犬神を連れてきたことがバレてしまい、シロアにこつてり搾り取られました。

あ、犬神に名前を付けました。

白いのが金華キンカ、黒いのが銀露ギンロ。

ネーミングセンスなんて前前世に置いてきたよ。
前前世にしたらクレームが来そう。

「さあ、わんちゃん達。ご飯の時間だよ。」

「あの、私の分…」

「は？」

怒られた。なんでや、私悪くないやろ。
ご飯…さようなら……ぐすつ

『……』

なんだよ、言いたいことがあるなら言いなさいよ。

『マスター：数時間前に食べたばかりじゃないですか。……太りますよ』
ふ、太らないし……

「ほら、早く行くよ。」

「どこに？」

「隣の国！ロステイア帝国！」

そう、ロステイア帝国だよ。名前が出て来なかつた。
ガラス細工が有名なんだつけ？こつそり買おうかな。
「しゅっぱーつ！」

「進行！」

「わふん！」

キンカが楽しそうに鳴くが、ざんねんながら2匹は影の中に入つて頂きます。

そんな顔をしてもダメです。私は騙されないからな。

『マスター、置いてかれてます。』

……え？ 本当だ。 マツテー

さて、ここはロステイア帝国です。

真っ直ぐシロアにくつ付いて来たらなんとか来れました。

途中で大先生が、

『……転移した方が早いのでは？』

とか言い出したけどもシロアがいるので歩いて来たよ。

それにもしても賑やかでいい国だな。

人間とエルフ、それにドワーフ達が争いも無く仲良くしている。

良いよなあ、こういうの。

「ねえねえ、あっちに洋服店あるよ！ 行きたい！」

「うん、行こつか。」

すごい…可愛いです。

服選びは任せろー！ バリバリー！

『……マスター、生きてますか？』

なんとか：

正直言つて、自分が着せ替え人形になると思つてなかつた…
疲れた…寝たい。

「ちよつとお手洗い行つてくるね！」

「行つてらつしやい…」

ア、ア、ア、ア、ア、ア…ゾンビになりそう。なりたくないけど
にしても、日光で消えそう…あつい…溶けそう。

『マスター、シロアはトイレやけに長いですね。見に行つてみましょう。』

はーい。賛成でーす
で、どこ。わたし方向分かんなーい。

『転移します。』

大先生がそう言うと場所が変わる。

辺りを見渡すと薄暗く、妖精達の姿も見えない。

『マスター！ 5km程先シロアが何者かによつて連れ去られそうになつています！』
長い。遠い。

てかれつて王国騎士じやないの？

『おそらくですが、シロアの力を利用したいが為に誘拐使用としたのでは無いでしよう
か？』

……力を利用する？

それじやあこの国はシロアの力を使つて他国に戦争を吹つかけに行くの？

『はい…そうなると、シロアは……』

そんなの嘘でしょ。確率操作で何とか出来ないの？

いやだよ。いやだ。

『…不可能です』

早く助けなきや。シロア、待つてて。

そう決意すると同時に何者かによつて拘束される。

しかし、力だけでは私に敵いもしないので投げ飛ばす。

とりあえず逃げるんだよオ!!

王国なんてなかつた

ゼウス、王城つてどこなの？

『……マスター、王城は大きな建物です。目の前にあります。』

あ、なんかすごい呆れられた氣がする。

まあ、そんな事はどうでもいい。飛ばしてくれ。

『転移します。』

そう告げると目の前の景色ががらりと変わる。

目の前にいるのは無駄に豪華な服装をした小太りな王様。

その横にはちつちやい王子？が。

それと鎖を引きちぎっているシロアヨリラ。誘拐、ダメ。絶対

いきなり現れたのに驚いたのか、目を瞬いている。
私の友人を攫うなんていい度胸じやないか。

「な、何者じや！名を名乗れ！」

「ヴエルアムール、だ。何故、シロアを攫つた？」

「僕の妃にするためだ！」

声を挙げ、王子がこちらへ答えた。

何の階位もない者が結婚しても良くて側室では……？

どうやら頭があれなちびっ子はシロアに一目惚れしたらしい。
こんなにも頭の悪い人を見るのは初めてだ。

とりま帰ろう。

「シロア、帰ろう」

「はーい。あ、少し忘れ物。」

なんだろうな？ そう思い、後ろを振り返る。

すると、シロアが王子にビンタして説教していた。

『…マスター、シロアは正常ですよ？』

あつはい。

どうやらゼウス大先生には私の考えていることはバレバレらしい。

ていうか大先生、貴方シロアの力をうんたらかんたらとか言つてたじやないすか。

関係なかつたんですけど先生?

『……それは気のせいです。』

え?でも私おぼえ

『気のせいです。』

先生が否定し続けるのでこれ以上無駄だと思われる。

まあ、失敗は成功のもとつていうしね?シカタナイヨネ。

『ですね!』

なんでそんなにチミは嬉しそうなんだよ。

失敗を認めたまえよ。失敗を。

『嫌です。』

あ、拒否された。

*

少女移動中

*

「さて、シロアちゃん。私ね、国を作ろうと思います。」
「はい、馬鹿ですね。理由は。」

「理由？そんなもん楽しそうだからだよ！」「ダメだこいつ、早く何とかしないと。」

最近私の扱いが酷いよね。

その気になれば世界を吹き飛ばす位はできるのにねえ。

『私がついてますよ！さあ、国を奪いに行きましょう、目指せ恐怖での支配！』

はい採用。

楽しんでこそ的人生だからね。いや、竜生か？

「そういうわけで、暫く留守にするからね！！」

「どういうわけよ。私はエスパーじゃないのよ！」

「察して感じ取れ！金華は置いてく！」

「待てやゴラア！」

大丈夫、でかいところ取つてくるから。

ふかふかベット、それに美味しいご飯待つてろよ！

メイドさんは私が頂いて……ゲフングフン。

ゼウス大先生、どつかでかい国ない？

『……精霊国家オフィーリアとかどうです？名前が綺麗な割に屑な王様が治めているの
で王を潰してしまえば支配しやすいと思いますよ。』

なるほど、オフィーリアね、一体どこよ。

『……ゲフングフン。飛びますね。』

露骨にそんなことまで知らないのかこいつはみたいなのが滲み出てるよ！？
せめて隠そよ。ねえ！